

地域ととともに



トキが舞い降りる能登を夢見て
「里山マイスター」が
展開する
環境配慮型の
農村再生とは？

1年で1m. 30年後には消滅？

千里浜なぎさドライブウェイ
海岸侵食のメカニズムと対策

当時の高僧の書き込みも

志賀町の古寺で見つかった
江戸時代の経典2095冊

子どもの自然体験活動をサポート


知識と技能を身につけた
「里山里海リーダー」誕生

「沢野こぼろ」をブランド化

学生と七尾の農家が一致団結
地域団体商標を獲得へ

金沢で2年目の合同学祭

現役メンバーによる
「創ル部」の活動レポート



手をつなげば、
きつとつまぐらぐ。

大学の「知」と地域の「活力」
連携から広がる無限の可能性
皆さんと一緒に、この街を、そして住む人を元気にしていきたい

地域とともに
金沢大学社会貢献室





金沢大学が始めた“大学らしからぬこと” 「能登里山マイスター」 養成プログラムが目指すもの

過疎化や高齢化など、多くの問題を抱える奥能登地域。平成18年10月、金沢大学は珠洲市に研究交流拠点となる「能登半島 里山里海自然学校」を開校した。それから1年。今度は平成19年度文部科学省科学技術振興調整費を得て、能登の活性化に資する地域のリーダーを養成することを目的とした「能登里山マイスター」養成プログラムを投入したのだ。本プログラムでは「トキがよみがえる里山再生」をキーワードに、環境配慮型の農林業をベースとしたビジネスを創出していく。能登に拠点を設けたことでますます広がりを見せる奥能登再生の取り組みと狙いを紹介する。

社会貢献室 宇野文夫

※トキの写真はいずれも佐渡トキ保護センター提供





金沢大学の林学長（中央）と奥能登4市の首長が地域づくり連携協定を結びがっちりと握手した



旧の小学校校舎を再活用した能登学舎。看板を撤し、開講を祝った

10—40歳代の16人が 里山の専門家を目指す

能登半島の先端にある珠洲市三崎町。廃校となった小学校を再活用した「里山マイスター能登学舎」で、昨年10月6日に「能登里山マイスター」養成プログラムは開講式を迎えた。開講式のあいさつで、金沢大学の橋本哲哉副学長は「能登に高等教育機関を」という地元の方々の期待があり、今日ここに一つの拠点を構えることができた。環境をテーマに能登を活性化する人材を養成したい」と力を込めた。

ここで学ぶ1期生は19歳から44歳までの男女16人。金沢から2時間半かけて自家用車で通う受講生もいる。開講式では、受講生も自己紹介しながら、「奥能登には歴史に培われた生活や生きる糧を見出すノウハウがさまざまにある。それを発掘したい」「能登の資源である自然と里山に農林水産業のビジネスの可能性を探りたい

い」などと抱負を述べた。志を持って集まった若者たちの言葉は生き生きとしていた。

かつて小学校で使われていた紅白の幕を学舎の玄関に張り、あいさつと看板の除幕という簡素な式だったのが、地元の人たちも温かく開講を見守った。5年間に及ぶ大学の「能登里山マイスター」養成プログラムはこうして船出した。では、このプログラムは何を目指しているのか。

4市町と2大学が手結び 珠洲に人材育成の拠点

まず、能登の現状について、いくつか事例を示す。能登半島の過疎化は全国平均より速いテンポで進んでいる。とくに奥能登4市町（輪島市、珠洲市、穴水町、能登町）の人口は現在8万1千人だが、7年後の2015年には2割減の6万5千人、65歳以上の割合が44%を占めると予想される（石川県推計）。この過疎化はさまざまな現象となつて表出している。

能登半島では夏から秋にかけて祭礼のシーズンとなる。伝統的な奉灯祭は「キリコ」を担ぎ出す。キリコは収穫を神に感謝する祭礼用の奉灯が巨大化したもので、その高さは12mに及ぶ。黒漆と金蒔絵で装飾されたボディ、錦絵が描かれた奉灯、何基ものキリコが鉦と太鼓

のリズムに乗って社に集ってくる。華やかな祭りのなかにも能登の現実を垣間見ることが出来る。キリコは本来担ぐものだが、キリコに車輪をつけて若い衆が押している。かつて集落に若者が大勢いた時代はキリコを担ぎ上げたが、いまは人足が足りずそのパワーはない。車輪をつけてでもキリコを出せる集落はまだいい。そのキリコすら出せなくなっている集落が多くあり、社の倉庫に能登の伝統遺産が眠ったままになっている。

さらに、昨年3月25日の能登半島地震。マグニチュード6・9、震度6強。この震災で1人が死亡、280人が重軽傷を負い、370棟が全半壊、2千人余りが避難所生活を余儀なくされた。自宅の再建を断念し、慣れ親しんだ土地を離れ、子や孫が住む都会に移住するお年寄りも目立つ。能登の過疎化に拍車がかかる。もはや能登、とくに奥能登の地域再生は「待ったなし」の状態となった。



受講生募集パンフレット

こうした奥能登の現状に、大学は文部科学省科学技術振興調整費の採択を得て「能登里山マイスター」養成プログラムを投入することになった。奥能登に拠点を構えるにあたって、このプログラムに連携する輪島市、珠洲市、穴水町、能登町の4市町と、プログラムに講師派遣という形で参画する石川県立大学を交え、「地域づくり連携協定」を結んだ（昨年7月13日）。地域の現状を好転させたいと心から願っているのは当該の自治体である。ところが自治体にとって、課題の解決に向けて大学に協力を求めようとしても「敷居」が高い。そこで、連携協定を結ぶことで敷居を取り払い考えた。協定内容はごく簡単に地域再生、地域教育、地域課題の3点について協力するというもの。調印を終え、林勇二郎学長はそれぞれの自治体の首長とがっちりと握手を交わした。

プログラムの申請段階から関わった珠洲市の泉谷満寿裕市長は「能登には高等教育機関がないので、若い人材が都会に流失していく。このプログラムがUターン希望者らの呼び水の一つになってほしい」と何度も強調した。七尾市和倉温泉「加賀屋」の小田禎彦会長は「能登に人づくりの拠点ができることを待ち望んでいた」と話し、若手社員を受講生としてプログラムに送り込んだ。地域の期待は予想以上に大きかった。

環境配慮型の農業で ビジネスモデルを創出

それでは、能登学舎でどのようなプログラムが展開されているの



金曜日は多彩なゲスト講師による地域づくり支援講座(公開)が開かれる



エコツアーのプランニングを発表する受講生。1期生は社会人16人で、授業は演習や実習が中心だ

もう一つは珠洲市三崎町の能登学舎でのメインの授業で、土曜日の午前9時から正午まで「自然共生型能登再生論講座」「ニューアグリビジネス創出講座」「新農法特論講座」「営農実習」の4つの講座の演習ならびに実習を行なう。実習は農業のベテランが指導する。今年に入っている授業をいくつか紹介すると、農業参入した水産加工会社「スギヨ」が七尾市能登島に持つ農場でニンジンの収穫をテーマに営農予備実習(1月19日)を行った。なるべく農業を使わない野菜の栽培のノウハウと加工、流通

か。学ぶのは社会人であり、地域貢献型の講座というコンセプトになっている。授業は2本立てとして行っている。一つは金曜日の午後6時20分から午後7時50分まで開かれる「地域づくり支援講座(隔週)で、一般市民も参加できるようなっている。駐車場が確保でき、交通アクセスがよい能登空港ターミナルビル(輪島市三井町)に特別教室を開設している。

生産量から品質への転換
農業の担い手定着を促す

このプログラムを文部科学省に申請する段階で念頭に置いた、お手本のような地域の事例がある。能登半島の付け根に羽咋市^{はな}神子原地区という過疎と高齢が進む集落(170世帯500人)がある。大量生産が望めない不利な栽培条件ながら、山のため池を共有し、人々は手をかけて稲を育てている。その米が「神子原米」としてブラ

を学ぶためである。そして、「知的財産法を生かした地域おこし」をテーマに大友信秀教授(法学部)が能登の「沢野ごぼう」、加賀の「ヘイケカブラ」といった特産野菜のブランド化について講義を行った(2月23日)。環境配慮型の農業をベースに、それをどうビジネス化するか。リアリティを持ったプログラムを提供している。「能登里山マイスター」養成プログラムの研究代表者の中村浩二教授(生態学)は口癖のように言う。「大学らしからぬことをやろう」と。知恵を出し合いながらの運営である。受講生には2年間の修了時に「今後能登で取り組む自然と共生した農業のビジネスモデル」の論文と就農計画の提出を求める。大学は修了者に「里山マイスター」の称号を与え、生態学や農村社会学システムに関する共同研究に参加してもらったり、情報提供などを通じてフォローアップしていく。

能登はその地形から大規模な河川がなく、平野も少ないことから、集落が共同でため池をつくり、その水を分け合って水田を耕してきた。個人ベースでは小規模農業であり、生産量を競う米づくりに是不向きだが、「ため池共同体」であることを生かし、集落がまとまってブランド米づくりに乗り出すことが可能である。いわば、米づくりが個人ではなく、地域ぐるみのコミュニティ・ビジネスとして成立する素地が能登にはある。追い風もある。食の安全と安心を求める消費者の声が高まり、昨年度(06年)から政府は新農業政

ンド化され、高級旅館の朝食に、あるいはその米で造られた純米酒はファーストクラスの機内食として供されるなど高い付加価値をつけることに成功した。生産量は多くないので、決して豊かな地区ではない。しかし、目立っていた空き家にも、神子原で米づくりをしてみたいと志す都会の4家族13人が入居し、地域は活気づいている。

策「農地・水・環境保全向上対策」を掲げ、環境保全型の農業へと大きく舵を切っている。生産量を誇るのではなく、環境に過度の負荷をかけない、品質の確かな農業への転換である。新しい農業の時代を担う人材を能登の地で育むことができないだろうか。風光明媚な観光資源や魚介類の水産資源にも恵まれている。これらの資源を生かし、農家レストランや体験農業、あるいは食品産業との連携による新事業の展開など、「農」をキーワードとする新しいアグリビジネスを創造する若い人材が定着すれば、能登再生の展望はほかに見えてくる。



能登里山マイスター養成プログラムの概要

「トキが舞う能登半島」を実現し 独自の環境再生モデルを構築へ

「能登里山マイスター」養成プログラムが具体化されるまでのいきさつや、どのような人材を能登で養成しようとしているのかについて、これまで述べてきた。ここでお分かりのように、主眼は「農業名人」を育成することではなく、環境配慮をテーマとしたビジネスを行なう若手人材の養成なのである。では、申請時に計画した60人の里山マイスターを育てれば能登を再生できるのか、それは容易ではない。次なる能登のビジョン、あるいは仕掛けが必要なのである。ここからが大学が目指す「能登里

本州最後の1羽が能登で捕獲された理由

環境配慮型の農業を行なうことで、副次的に水田にはドジョウやタニシといった生き物が増える。ある意味で単純なことが実は重要なことであるのに気づくのに半世紀を要している。急減したトキが国の特別天然記念物に指定された50年代、日本は戦後の食糧増産に励んでいた。農業と環境の問題に

いち早く警鐘を鳴らしたレチェル・カーソンは60年代に記した名著「サイレント・スプリング」に、「春になっても鳥は鳴かず、生き物が静かにいなくなってしまう」と記した。農業は豊かになつたけれども春が静かになつた。

70年、日本で本州最後の1羽のトキが能登半島の穴水町乙ヶ崎で捕獲された。愛称は「能里(フリ)」、オスだった。繁殖のため佐渡のトキ保護センターへ送られたが、翌71年に死亡した。解剖された能里の肝臓や筋肉からはDDTなどの有機塩素系農薬や水銀が高濃度で検出された。そして03年、佐渡の「キン」が死亡し、日本のトキは沈黙したまま絶滅した。

その後、同じ遺伝子を持つ中国産のトキが佐渡で人工繁殖し、91羽(今年1月現在)に増殖している。環境省は、鳥インフルエンザへの感染が懸念されることから本州での分散飼育を始め、昨年12月に4羽(2つがい)を東京都多摩動物園に移送した。能美市にある県営「いしかわ動物園」も分散飼育の受け入れに名乗りを上げていく。分散飼育の後、人工増殖したトキを最終的に野生化させるのが国家プロジェクトの目標である。

里山の自然を知るため、珠洲市内の山林に入り、アテと呼ばれる能登ヒバを見学する受講生



途絶えたとはいえ、

能登に最後の1羽まで生息したのにはそれなりの理由がある。能登には大小2千ともいわれる水稲栽培用のため池が村落の共同体、あるいは個別農家により維持されている。ため池は中山間地にあり、上流に汚染源がないため水質が保たれている。サンショウウオ、カエル、ゲンゴロウやサワガニ、ドジョウなどの生き物が量、種類とも豊富である。ため池にプールさされている多様な生き物は用水路を伝って水田へと分配されている。

築立つ里山マイスターに 農村再生の夢を託す

もちろん、机上の話だけでは現実には進まない。かつて奥能登でトキはドゥと呼ばれ、水田の早苗を踏み荒らす害鳥とされた。ドゥとは「追っ払う」という意味である。トキを野生復帰させるための生態環境的なアプローチに加え、生産者と住民を交えた地域の合意形成が必要である。トキと共存することによる経済効果、たとえば農産物に対する付加価値や観光、グリーンツーリズムなどへの広がりなど経済的な評価を行ない、生産者や住民にメリットを提示しながら、トキの生息候補地を増やしていくといった合意形成が不可欠である。その上で、大学が能登半島で地域住民と協働して実施している生物多様性調査に都市の消費者も加わってもらう、長期モニタリングにより農環境の「安全証明」を担



能登に再びトキが生息できるような里山の再生を目指す

保していく仕組みづくりができれば、環境と農業、地域と都市の生活者が連携する自然と共生した能登型の環境再生モデルが実現するのではないかと。里山マイスターにぜひ、トキが舞う能登の農村再生を託したい。それは能登の里山ルネサンス(再興)といつてよい。

1月26日、能登空港ターミナルビルで金沢大学「里山プロジェクト」が主催して、トキの生息環境をテーマに公開シンポジウム「里山里山の生物多様性保全と能登半島にトキが舞う日をめざして」を開催した。当日は雪に見舞われ、早朝に震度5弱の余震があったにもかかわらず、定員を超える180人もの聴衆が訪れ、トキに対する能登の人たちの関心の高さが伝わってきた。大学にできる地域貢献、あるいは社会貢献とは地域と手をつなぎ、夢を育み、実現に向かって知恵を出し前に進むことだと考えている。希望はその先に見える。



特集

3

金沢大学が始めた“大学らしからぬこと”

「能登里山マイスター」 養成プログラムが目指すもの

自然・文化

8

「コンクリート文明」が招いた砂利不足

海岸侵食で消えゆく千里浜 再生に向けて走りだす



自然・文化

10

志賀町の古寺に眠る大蔵経
能登半島地震を機に初調査



人材養成

11

自然と触れ合う子どもを導く
里山里海のリーダーを養成



地域課題

12

七尾の伝統野菜をブランド化

ごぼうで深まる地域との絆 学生参画で「新商標」出願へ

地域課題

14

学生運営の「創ル部」が
2年目の合同学園祭

もっと自由に、もっと深く。

「3学域・16学類」スタート。

人間社会学域

人文学類/法学類/経済学類/学校教育学類/地域創造学類/国際学類

理工学域

数物科学類/物質化学類/機械工学類/電子情報学類/環境デザイン学類/自然システム学類

医薬保健学域

医学類/薬学類/創薬科学類/保健学類



金沢大学
KANAZAWA
UNIVERSITY

「コンクリート文明」が招いた砂利不足

海岸侵食で消えゆく千里浜 再生に向けて走りだす

波打ち際でのドライブが楽しめることで全国的にも有名な羽咋市の千里浜海岸（千里浜なぎさドライブウェイ）が、年々侵食の影響を受けている。これまでの観測によると1年に1mずつ砂浜が削られていることがわかっており、このまま海岸侵食が進めば、30年後には砂浜がなくなってしまう計算だ。千里浜の現状に警鐘を鳴らす自然科学研究科長の石田啓教授と地元の人々の動きを追った。



県内有数の観光スポット千里浜なぎさドライブウェイ。夏になると多くの車が行き交う

全国で進む砂浜の減少 砂利の過剰採取が要因

砂浜の減少は、千里浜に限らず全国の海岸で進んでいる。砂浜の砂は、山にある砂利が川を伝って海岸へ流れるまでの間に小粒化し、堆積されるが、石田教授によると「コンクリート文明」による砂利の採取が侵食を招いている」という。木造による建造物がほとんどだった昔に比べ、道路やトンネル、林立する高層ビルなど、文明はその発展とともにコンクリートを求めるようになった。コンクリートを作るには、セメントのほかに砂利や砂が欠かせない。自然界にあるこれらの原料を人間が「先取り」するために、結果として海岸に堆積する砂が減ってきているのだ。石田教授は、これまでに減少した

砂利や砂の9割がコンクリートの原料として使われ、残り1割がダムに堆積されているとみる。

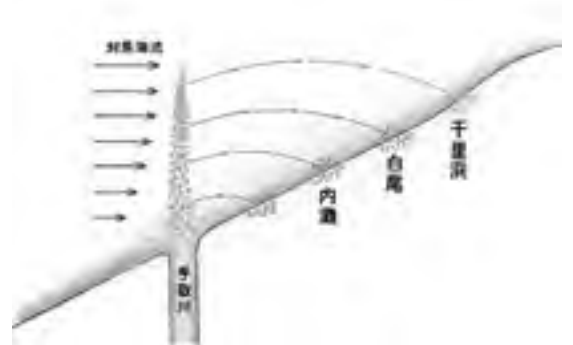
昭和50年代に入り、山岳や河川からの土砂採取を禁じる法律が制定されたが、法整備が進む以前は半ば「取り放題」の状態だったため、砂浜の「原料」になる河床の砂利自体が激減した。石田教授は「過去、山や河床の砂利を採取し過ぎた結果、海岸侵食を受けた砂浜は、河川を流れる土砂だけでは養成されにくいという悪影響を生んでいる」と指摘する。

街の近代化が招く悪循環 地球温暖化の影響も

ビルの高層化が進めば建物自体の床面積が増えるため、使用するコンクリートの量はさらに増える。道路が隅々まで整備されれば砂利

道がなくなり、雨などで川や海に流れる砂が減る。河川の整備で土手もコンクリート化され、そこから流れ出る砂もなくなってしまう。もちろん、道路や河川の整備そのものにも大量のセメントが必要だ。こうした悪循環が、砂浜を減らす大きな要因になっている。

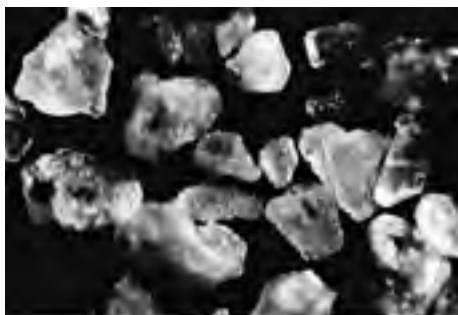
砂浜が減る理由はこれだけではない。地球温暖化の影響もある。一般的に温度が上昇すれば水は膨張する性質を持っているが、温暖化によって地球の表面積の4分の3を占める海水が膨張しており、陸地が減っていく傾向にあるという。温暖化が進むと、まず最初に犠牲になるのは海岸線であり、砂浜の減少は「温暖化のシグナルの一つ」とも言うことができるだろう。このようにいくつかの要因が重なって、海岸侵食に歯止めがかからぬ状況になっているのである。



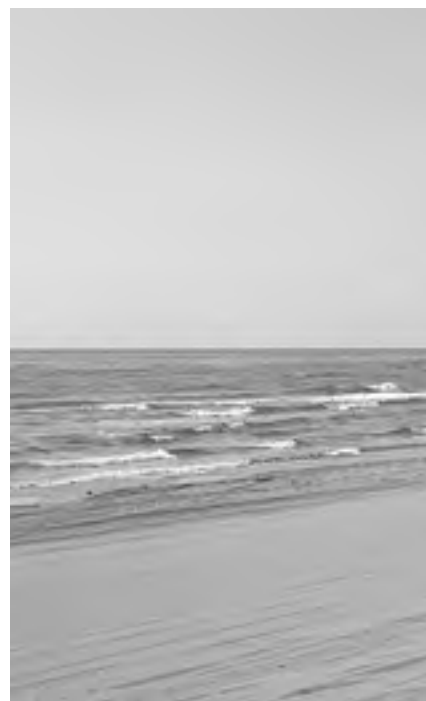
手取川から流れ出た砂利が千里浜まで届く（イメージ図）



平成元年ごろに撮影された航空写真



砂の顕微鏡写真。透き通ったガラス成分が多く含まれる



石田教授ら有識者が対策「養浜工法」で回復目指す

砂浜が侵食される現状について対策を練り、貴重な観光資源でもある千里浜を守ろうと、石川県は平成17年、有識者らによる「千里浜海岸保全対策検討委員会」を立ち上げた。委員長には石田教授が就任し、侵食を防ぐ工法について他の委員らとともに議論を重ねた。

力を弱め、砂浜が削り取られるのを防ぐ効果があるが、見た目によくないとの批判も受けやすい。そのため、近年は景観にも配慮し、幅を広くした離岸堤を水面下に沈める「人工リーフ工法」が注目を集めている。

また、現実的な方法ではない。そこで、千里浜で進められているのが、別の場所にある砂を運んでくる「養浜工法」だ。

砂で養浜しなければならぬのだ。羽咋市滝町にある滝港は、海流の流れから砂がたまりやすい。ここに堆積する砂は千里浜と性質が一緒のため、過去30年近くにわたって毎年3千㎡の砂が千里浜に運び込まれた。これによって侵食の進みを遅らせることはできたが、現状でも阻止めはかかっている。石田教授は「異常気象などが重なることができなくなる危険性がある。つまり、千里浜と同じ性質の砂で養浜しなければならぬのだ。」



保護活動の盛り上げに期待する石田教授

いるが、もっと大量の「仕送り」が必要だ」と訴える。

研究会や活動を通じ地元にも危機意識が浸透

過去30年近くに及ぶ石田教授らの地道な活動を通して、地元の人々にも危機意識が芽生え始めている。羽咋青年会議所前理事長の畝和弘さん(39)は、昨年の同会議所の活動で千里浜の問題を積極的に取り上げ、同年3月の例会では石田教授を招いて、現状や課題に対する認識を深めた。

同会議所も加わる「千里浜海岸保全・利活用推進協議会」では、丘にある砂を浜まで運ぶ「二人一砂運動」を提唱。多くの市民が参加し、実際に養浜活動に取り組んだ。また、ワークショップ「千里浜・

って砂浜を削り取られるペースが上がり、少しの養浜では追いつかなくなってきた。千里浜再生には養浜工法が最も適切だと考えて

夢の創造会議2007」には市民約150人が参加し、海岸保全に対する機運を盛り上げた。

畝さんは「千里浜は全国に誇れる海岸なのに、地元の人々の関心はまだまだ低い。これらの運動を盛り上げていくために、引き続き石田先生や大学の力を借りたい。学生にも千里浜活用と保全のアイデアを出してもらえればありがたい」と訴える。

日本海の荒波がさらっていく砂浜の量を考えれば、養浜にも限界はあるだろう。とはいえ、海岸侵食は待たない状態であり、千里浜の保全には地元の人々の協力が不可欠だ。畝さんも「住民に関心を持ってもらうための仕掛けづくりが大切だ」と説くように、さらなる機運の高まりが大きくなるだろう、やがて「千里浜を守るための大きな波」に化けることを期待したい。石田教授の研究に学生の力も加われば、きっと「潮目」も変わるだろう。



「千里浜がもたらす経済効果は大きい」と指摘する畝さん

志賀町の古寺に眠る大蔵経 能登半島地震を機に初調査

志賀町の真宗大谷派常徳寺で昨年8月、全2095冊にも及ぶ江戸時代の経典「黄檗版大蔵経」の調査が行われた。能登半島地震で境内にある経蔵の一部が壊れたのを機に、文学部の森雅秀教授らが確認した。経蔵には経典以外にも多くの資料が残されており、地元関係者は今後の進展に期待を寄せている。



地震で破損した輪蔵（左）と経蔵

黄檗版大蔵経は江戸時代初期、黄檗宗の僧だった鉄眼が中国から渡来した「万歴版大蔵経」をもとに作ったとされ、宗派を問わず各地の有力な寺院に広まった。常徳寺では、真宗大谷派の高僧で15代住職も務めた得任が黄檗版大蔵経を収集。275個の箱に収められた大蔵経は、本堂のそばにある経蔵内の「輪蔵」（大蔵経を収納する棚）に保管されていたが、昨年3月の能登半島地震で中身が散乱したため、現在（20代）の藤懸了世住職が知己の仏教研究者を通じ、



常徳寺に保管されていた黄檗版大蔵経

大学に修復と調査を依頼した。藤懸住職は、「幼いころから大蔵経の存在は聞かされていたが、具体的に中身がどのようなもので、どれほどの価値があるものかが分からなかった」と振り返る。

学生が手作業で修復 門徒向けの説明会も開く

森教授らは昨年5月に常徳寺を訪れ、経蔵内の様子を確認。8月2日から3日間、日本史と民俗学専攻の准教授2人、学生16人とともに散乱した大蔵経の整理と修復にあたった。本堂では、白い手袋をはめた学生たちが真剣な表情でのりづけやホコリ払いなどの作業



調査の成果を語る森教授

を進め、修復を終えた大蔵経は購入したスチール製の棚に仮置きされた。翌3日午後には開かれた門徒向けの説明会では、黄檗版大蔵経の由緒や中身に関する質問などが相次ぎ、手次寺門徒が所属する寺への関心の高さをうかがわれた。調査は補足する形で11月にも行われた。各地に伝わった大蔵経は、全て消失したり、欠本したりしたケースが多くあるとみられるが、同寺の黄檗版大蔵経は完全な状態で残っていた。欠本なしの状態で見つかるのは珍しいという。



学生らの来訪を喜ぶ藤懸住職

解くことで、当時の得任の思考や常徳寺を取り巻く経済的、社会的な状況が透けて見えてくるはずだ」と語る。

「大学は本当に頼もしい」 今後の継続調査にも期待

藤懸住職は「学生さんたちの修復作業はありがたかったし、（大蔵経の）丁寧な扱いをとてもらう感じがした。先生からは保管方法や中身について聞くことができ、安心して。大学のような存在は本当に頼もしい」と胸をなで下ろし、「これからも研究を目的とした学生さんの来訪には快く応じたい」と話す。森教授によると、大蔵経以外の資料の分析は今後も継続的に進めていくといい、新たな史実の発見や、常徳寺と大学のさらなる交流に期待が集まっている。



8月に行われた調査で經典の修復作業にあたる学生

自然と触れ合う子どもを導く 里山里海のリーダーを養成

2校目の自然学校開校で 人材確保が急務に

角間キャンパス内の里山をフィールドに活動する「角間の里山自然学校」に続き、平成18年10月、三井物産環境基金の支援を受ける「能登半島里山里海自然学校」が珠洲市三崎町小泊を拠点に開校した。開校が決まっただけで、自治体などから児童、生徒を対象にした自然体験活動開催への協力、講師の派遣といった要望が相次いで寄せられ、地元への期待の高さがうかがわれた。



自然体験活動のベテラン指導員による講義



雑木林の手入れ方法を地元ボランティアに教わる

大学では2校目の自然学校ということもあって、里山里海自然学校で提供するプログラムの内容や進め方など、いわゆるソフト面についてはこれまで培ってきたノウハウを基に対応することができた。しかし、事業拡大時に必ずと言っていいほど問題になるのが人材の確保だ。

プログラムの内容もさることながら、子どもたちを導く人材に対する保護者らの期待は大きい。ましてや子どもの安全に関わる役目だけに、一定のスキルを持った人材が必要となる。大学も体験活動を実施するたびに信頼できる人を

探しだし、派遣しなければならぬ。そこで、大学が今年度からスタートさせたのが「里山里海リーダー養成講座」だ。

大学生がノウハウ学び 目配りできる指導者に

自然体験活動には、多いときで数十人の子どもの参加がある。しかし、屋外が中心の活動で講師が一度に目を配れる人数には当然限りがある。ここで養成する里山里海リーダーとは、そんなときに子どもたちの安全を確保しながら活動をきめ細かく補助する、いわ



民宿のお母さんからアウトドア料理を習う

自然と向き合い、実際に見て、触れて、時には火や刃物を使用しながら体験活動を満喫する金沢大学の自然学校。外で遊ぶ機会が減っている現代の子どもたちにとっては貴重な体験だ。そんな活動を安全に楽しく運営するための人材不足に悩まされていた自然学校で昨年の春、学生を活動のリーダーに育てる取り組みが始まった。

社会貢献室研究員 中村晃規



採集したキノコを調べる子どもたちとリーダー

能登での1泊2日の合宿を含む4日間で、基本となる指導者としての心構えや里地についての専門的な知識を学ぶ座学、田植えや里山保全活動といったプログラムへの体験参加、赤十字指導員による救命法などの講習を受けた。こうして誕生した里山里海リーダーは、自然学校からの要請に応じ、輪島市や珠洲市、金沢市周辺で開催された10もの自然体験活動に参加し、活躍した。

県内各地で力を発揮し 大学と地域との交流促す

「班長」的役割を担う人材だ。昨年5月、金沢大学五十周年記念館「角間の里」に同大を含む県内の大学から8人の学生が集まった。CONE（コン・NPO法人「自然体験活動推進協議会」の「自然体験活動リーダー養成カリキュラム」に沿った「里山里海リーダー養成講座」を受講する学生たちだ。CONEとは自然体験活動の普及、指導者の育成に取り組んでいるNPOで、ここが定めたカリキュラムを修了すれば、一般的にも指導者としての技能・知識を持つと認定される。

里山里海リーダー養成講座では、昨春に誕生したばかりの里山里海リーダーだが、すでに自然学校での体験プログラムには必要不可欠な存在になっている。里山里海自然学校に常駐する赤石大輔研究員は「講座を修了した学生には、小泊の自然学校を舞台に地域と大学をつなぐ架け橋になってほしい」と期待を寄せる。大学では、県内の自然体験活動を支える人材を育成していくとともに、大学生と地域とのさらなる交流を促すため、来年度以降も講座を開講し、リーダーを養成していく。

ごぼうで深まる地域との絆 学生参画で「新商標」出願へ

能登半島の付け根に位置する七尾市で、古くから特産品として親しまれてきた「沢野ごぼう」。この伝統野菜をブランド化させ、まちおこしの起爆剤にしようと、地元沢野町の生産組合が立ち上がった。ブランド化への情熱は法学部の学生にも飛び火し、やがて継続的な交流へと発展。地元住民の情熱に学生の若さが加わり、七尾のまちづくりは新たなステージを迎えた。

地域連携コーディネーター 網田百合香



和倉温泉で開かれたイベントで、沢野ごぼうを使った商品をPRする学生



将軍家献上の沢野ごぼう 県が結んだ七尾との縁

沢野ごぼうは、一般に売られているごぼうよりも太くて大きいのが特徴だ。1mを超えるものも珍しくないが、調理がしにくくなるため、幅3cm、長さ70cmが出荷時の基準になっている。肉質が非常に柔らかく、ほくほくとした食感が楽しめ、江戸時代には加賀藩の特産品として将軍家や京都の寺院にも献上された。地元の人々が誇る伝統食材の一つでもある。

数年前からブランド化へ向けて動き始めた生産組合は、「実際にどう動けばいいのかわからない」という問題を抱えつつ、試行錯誤を繰り返していた。そこに知的財産法ゼミの大友信秀教授を引き合わせたのが、石川県地域振興課で地

域問題と高等教育のマッチングを担っている俵幸嗣課長だ。以前、県外の仕事で知り合った2人は約10年ぶりに金沢で再会し、地域問題に精通する俵課長が沢野ごぼうプロデュースの話を持ちかけた。沢野ごぼうに情熱を注ぐ生産者と知的財産法のエキスパートを目指す学生。一見畑違いにも思える2つの分野に取り組み両者が、こう



七尾の伝統野菜、沢野ごぼう。味と香りのよさがウリだ



生産組合の人に教わりながら収穫を体験する学生

してブランド化という1つの目標を共有することになった。

知財ゼミの学生加わり 「地域団体商標」獲得を

平成18年10月に初めて沢野町を訪れた学生らはまず、沢野ごぼうの収穫を手伝ったり、収穫祭で販売を担当したりするなどして生産者との交流を深めた。毎週開かれるゼミでも、ブランド化や広報手段について検討を加え、生産者とも議論を重ねるうちに、組合が目



沢野ごぼうは縄を使って掘る伝統がある

指していた「沢野ごぼう」の名を地域団体商標として登録したい」という目標に向けて具体的に動き出すことにした。

従来の商標制度をより柔軟に運用する地域団体商標制度は、地域の産品をブランドとして保護し、生産者の信用を維持するのが目的。農産品や海産物、工業製品、温泉名などで一定の要件を満たせば、出願することができる。

地元ではすでに沢野ごぼうを使ったソフトクリーム、クッキー、うどんなどの加工品が開発され、多くはすでに商品化されているが、商品化への道筋がついていた。地域団体商標を獲得すれば、沢野ごぼうにさらなる箔が付き、全国に発信するための足がかりにもなる。

ただし、出願には「一定の認知度（周知性）」を証明することが求められる。沢野ごぼうにとつて、ハードルはけっして低くなかった。ないものづくしで始まった地域団体商標獲得への取り組みだったが、昨年2月に出願主体となる「沢野

ごぼう事業協同組合」を設立。続いてロゴマークを公募し、5月には学生が組合のホームページを立ち上げた。

地域団体商標について授業で学ぶのであれば、おそらく1回きりで終わるだろう。しかし、彼らはそこに焦点を当てて教室を飛び出した。学生はブランド化という目標に向けて奔走することで、講義を受けるだけではけっして分からない地域団体商標獲得までの苦労と、地域全体が一致団結することの難しさを学んだのである。

学生の来訪を常に歓迎 個人別宅を無料で開放

一方の組合も、「もつと学生に来てもらいたい」来てくれるだけで活気が出る」と大学の参画を歓迎している。学生の活動拠点となる場所を作り、気軽に訪れてもらうため、組合員の谷川与志夫さん（61）は今年1月、所有する別宅を開放した。

もちろん町内には、学生も使える公民館などの公共施設があるが、管理や手続きで気を遣うことが多い。しかし、谷川さんの別宅は、「事前の連絡」と「来たときよりもきれいにすること」さえ守れば、自由に使える。ゼミで沢野ごぼう担当のリーダーを務める道野卓さん（3年）は、「地元の方の好意は素直にうれしい。この家があれば収穫祭の前日に七尾に入り、会場設営から手伝える。また、ゼミ合宿などでも活用してみたい」と今



地元住民と一緒に郷土料理を作り、交流を深めた

後の活動の広がりに期待する。

沢野ごぼうに限らず、七尾のまちづくりなどに関わる活動であれば、施設はこの学生に対しても無料で開放している。広く学生に使ってほしいとの思いから、玄関先には高等教育機関が連携する「大学コンソーシアム石川」の名前を入れた「大学コンソーシアム石川 ゲストハウス谷川」と記した看板を掲げた。

民家を学生に自由に使用せるといふ決断は、簡単にできることではない。これは、沢野ごぼうのブランド化に向けて一緒に汗を流してきたからこそ得られた「信頼関係の賜物」といえるだろう。

生産拡大の兆し広がる 輪島との地域間交流も

ブランド化に向けた周辺の動きも、少しずつ活発になってきた。

沢野ごぼうは砂地で育つ普通のごぼうとは違い、粘土質の固い土壌で栽培される。種まきや収穫時には畑を1mの深さまで掘り下げ

ねばならず、生産者にとつては年を重ねるほど重労働になってしまふ。そのため、近年は栽培を断念する農家も多かったのだが、新しい組合の活動が周知され始めたことで需要が高まり、栽培を再開する農家が出てきた。また、沢野ごぼう用に改良された農機が開発され、増産が望めるようにもなった。

地域間のブランドごぼう交流の話も出てきている。ゼミでは、輪島市三井町の「細谷ごぼう」のプロデュースにも関わっており、沢野ごぼう事業協同組合の村尾忠宏副理事は「品質の似ている細谷ごぼうの生産者と互いのごぼうを持ち寄り、切磋琢磨する会を開きたい」と学生を通じて地域間の交流に発展させたい考えた。

ブランド化への第一歩 年内の登録ほぼ確実に

沢野ごぼうのブランド化は短期

間では終わらない。地域団体商標については、順調に進めば今年中の獲得が見通せるが、その後もブランドの維持や新商品開発など、やるべきことは山積みだ。

ゼミ内では現在、4年生から引き継ぎを受けた3年生が主軸になり、申請補助や広報支援などの活動を続けている。七尾で学び、卒業していく学生に「七尾を第2の故郷だと思っしてほしい」とエールを送る組合員。学生たちも「七尾に行くのは研究のためだけではない。地元の方に会うのが楽しいから」と笑顔で応じる。

両者の活動を支える大友教授は、「授業で教えることはただの知識だが、自分で学び取ったことは応用が利く。地元の人と一緒に悩み、失敗し、学ぶ。体験を通じて法学の生かされている現場、またそこにある課題や限界を学び取ってほしい」とブランド化への取り組みを温かく見守っている。



学生の活動拠点としてオープンしたゲストハウス

学生運営の「創ル部」が 2年目の合同学園祭

**学生だけで企画、運営
1万5千人を動員**

まだ夏の暑さが残る昨年9月23日の日曜日、「合同学園祭'07」が金沢市の金沢中央公園で開催された。

学生団体「創ル部」が主催し、1日限定のイベントながら1万5千人を超える来場者が多彩な催しを楽しんだ。

合同学園祭は昨年引き続きの開催で、学校の垣根を取り払い、企画から運営まですべてを創ル部の部員が担った。企業などが出展する33ものブースが会場を取り囲み、メインステージではクイズや



多くの来場者を集めた合同学園祭'07



トークで会場を盛り上げる

ダンスバトルなど華やかな催しが繰り広げられた。呼び物の一つ「ファッションショー」では、ミュージカル形式を取り入れるなど学生ならではのユニークなアイデアが光った。

「こんなに多くの学生がいるのに、なぜ金沢の学園祭はいまいち盛り上がらないのか?」そんな些細な学生の思いつきから始まった活動だが、最終的には石川県内の28校から集まった学生350人に、53社もの企業が協賛する「金沢の学園祭」を作り上げたのだ。

**スポンサー探しに苦勞
3万円の協賛金に涙**

前年度に引き続き、07年4月から活動を始めた創ル部「合同学園祭'07実行委員会」。まずは告知を兼ね、金沢でも最大級のお祭りである「金沢百万石祭り」に参加した。



PR用のプラカードを手作りする部員

57人の部員がお揃いのTシャツにジーンズ姿で、曲の合間に入れる拍子を「合同学祭!」とアレンジして約3時間、市内を元気に練り歩いた。百万石祭りの来場者からは「何かやるの?」「頑張ってる」と声がかかる。5月には石川県と金沢市、大学コンソーシアム石川の

後援が決定し、地域の人の温かい声援を受けた部員は皆「成功できると確信した。」

学園祭の準備にあたっては、当初から大きな問題も抱えていた。初年度の協賛企業の一部から「支援打ち切り」を通告されていたのだ。開催日だけは決定していたにもかかわらず、資金はゼロで活動拠点もない。そんな逆境に意欲を駆りたてる部員がいる反面、不安定な状態は、時に部員の心を弱く

金沢を中心とする13の大学・短大・高専・専門学校が、合同の学園祭を開催すべく立ち上がった。学生が「自分たちの手で街を盛り上げたい」という思いが、約1万5千人の心をつかむことに成功したのだ。学都金沢で今、新たなムーブメントを起すべく奮闘する私たち「創ル部」の活動を紹介する。



文学部 近藤珠美

もする。「開催なんて本当にできるのだろうか」と弱音を吐く仲間が続出した。

しかし開催日も決まった今はやるしかない。初めて組む予算計画、資料作成、企業との交渉や連絡など、「分からないからできない」のではなく、「分からないけどやってみる」というスタンスを常に念頭に置き、私たちは挑戦を続けた。最低限必要な資金は300万円。

夏休みには部員全員で企業のドアを叩き協力を求め、初めて協力してくれた企業からの3万円に涙した。学生らの熱意が伝わったのか協賛企業は徐々に増え、9月に入つてようやく開催の見通しが立った。

**「金沢に感動と衝撃を」
3年目に向かって飛躍**

最終的には成功を収めた2年目の合同学園祭だが、創ル部にはまだまだ課題が残る。多くの学生は卒業してしまつたため、後継者を育てなくてはならないのだ。活動場所はいまだに空き教室で、部の認



イベントの成功を喜ぶ創ル部のメンバー

知度もまだまだ低い。人を呼び込む学園祭だからこそ、もつと多くの人に楽しんでもらえるイベントや仕掛けも必要だ。「金沢に衝撃と感動を」をモットーに、「魅力ある学生の街を全国に伝えたい」と願うアツい学生集団は、まだ動き始めたばかりなのである。

創ル部の合同会議は毎週水曜日午後6時から石川県NPO活動支援センター「あいむ」(旧県庁舎2F)で。問い合わせはinfo@tukuru.org.jp。

地域のニーズに応える
【大学の総合窓口】



大学の知と
地域のニーズを繋ぐ
【コーディネーター】



大学の社会貢献に関する
【情報発信・交流拠点】



金沢大学 地域連携推進センター

平成20年4月から「社会貢献室」と
「大学教育開放センター」が統合され、
『地域連携推進センター』になります。

〒920-1192 金沢市角間町 TEL 076-264-5290 FAX 076-263-4045
<http://cr.lib.kanazawa-u.ac.jp/>



知との出会い
【公開講座・ミニ講演】



市民と大学の交流の場
【サテライト・プラザ】



人と地域を繋ぐ
【指導者養成講座】



●編集後記/「がんばっています能登半島」。
この文字を能登有料道路や車のステッカー、
刊行物などでよく目にします。被災地を応援
したいという思いも重なり、今号は能登
の記事を多く掲載しました。復興を機に「新
生能登」へと生まれ変わるお手伝いが少し
でもできれば幸いです。

地域連携コーディネーター 網田百合香

平成20年3月発行
企画・編集・発行
金沢大学社会貢献室
印刷 能登印刷株式会社
協力 シナジー株式会社



【バックナンバーの紹介】
バックナンバーは、無料
(送料は実費)でお配りしています。
金沢大学社会貢献室へ直接取りに来るか、
郵送をご希望の方は事前に
お問い合わせ下さい。

金沢大学附属図書館

— 地域に開かれた生涯学習活動の拠点 —

附属図書館は本学の前身校である第四高等学校、金沢医科大学、金沢工業専門学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、金沢医科大学附属薬学専門部の各図書館を統合継承し、昭和24年に設置されました。



【お問い合わせ】 中央図書館 〒920-1192 金沢市角間町(角間北キャンパス)
Tel:076-264-5211 Fax:076-264-5208

医学部分館 〒920-8640 金沢市宝町13-1(宝町キャンパス)
(4月1日から医学系分館) Tel:076-265-2141 Fax:076-234-4211

自然科学系図書館 〒920-1192 金沢市角間町(角間南キャンパス)
Tel:076-264-6554 Fax:076-264-6553

【開館時間】 【休館日】 各館で異なりますので、詳しくはホームページをご覧ください。
<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>

図書館はどなたでも利用することができます。また、北陸三県に在住、または石川県内に通勤・通学している方には資料の貸し出しも行っていきます。

金沢大学 資料館

— 「学ぶこと」の
原点がここにある —



資料館は、金沢大学の歴史のなかで、研究・教育の結果生み出された様々な学術資料や大学自身を物語る史料を集め、整理・保存し、常時展覧会などを開催しています。「温故知新」-「学び」の歴史を刻む資料館で、何か新しい発見をしてみませんか？

九谷木米倣画大皿(暁烏陶磁器コレクション)



【開館時間】 12:00～16:00

【休館日】 土・日曜日、祝日、年末年始、展示替期間

【入館料】 無料

【お問い合わせ】 〒920-1192 金沢市角間町(金沢大学附属中央図書館内)
Tel:076-264-5215 Fax:076-234-4051
E-mail museum@ad.kanazawa-u.ac.jp
<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryo/index.html>